

第82回研究評価委員会 議事録

日 時：2026年3月17日（火）10：00～12：10

場 所：NEDO川崎本部 2301、2302、2303 会議室（対面&オンライン）

出席者（敬称略、順不同、*オンライン出席）

研究評価委員

木野委員長、浅野委員、五内川委員、鈴木委員、原田委員、松井委員、松本委員、吉本委員

NEDO

事業統括部：今田部長

事業統括部 研究評価課：薄井課長 植松主任 板倉専門調査員 須永専門調査員 松田専門調査員

対馬専門調査員 指田専門調査員 宮代専門調査員 川原田主査

北原専門調査員 樋口専門調査員 中島専門調査員

事業統括部 追跡調査・評価課：佐野課長 柳田主任

オブザーバー

経済産業省 イノベーション・環境局 研究開発課：堀課長補佐

議事次第

（公開セッション）

1. 開会、資料の確認

2. プロジェクト・制度評価分科会の評価結果について

(1) 燃料電池等利用の飛躍的拡大に向けた共通課題解決型産学官連携研究開発事業（終了時評価）

(2) 電力システムの混雑緩和のための分散型エネルギーリソース制御技術開発（終了時評価）

(3) 人工知能活用による革新的リモート技術開発（終了時評価）

(4) 革新的ロボット研究開発基盤構築事業（終了時評価）

(5) 炭素循環社会に貢献するセルロースナノファイバー関連技術開発（終了時評価）

(6) 海洋生分解性プラスチックの社会実装に向けた技術開発事業（終了時評価）

(7) 戦略的省エネルギー技術革新プログラム（制度終了時評価）

・評価報告書案の取りまとめ

3. 2025年度事業評価について【報告】

(1) 風力発電等導入支援事業（中間評価）

(2) 脱炭素化に向けた次世代航空機実用化開発調査事業（終了時評価）

（非公開セッション）

4. 2025年度 全体を通しての質疑

5. 2026年度の中間評価、終了時評価対象案件について【報告】

6. 追跡調査・評価について【報告】

7. 閉会

議事内容

(公開セッション)

1. 開会、資料の確認

- ・開会宣言 (評価事務局)
- ・配布資料確認 (評価事務局)

2. プロジェクト評価分科会の評価結果について

- (1) 燃料電池等利用の飛躍的拡大に向けた共通課題解決型産学官連携研究開発事業 (終了時評価)
- (2) 電力系統の混雑緩和のための分散型エネルギーリソース制御技術開発 (終了時評価)
- (3) 人工知能活用による革新的リモート技術開発 (終了時評価)
- (4) 革新的ロボット研究開発基盤構築事業 (終了時評価)
- (5) 炭素循環社会に貢献するセルロースナノファイバー関連技術開発 (終了時評価)
- (6) 海洋生分解性プラスチックの社会実装に向けた技術開発事業 (終了時評価)
- (7) 戦略的省エネルギー技術革新プログラム (制度終了時評価)

・評価報告書案の取りまとめ

【板倉専門調査員】 それでは、御説明いたします。2025 年度開催のプロジェクト評価分科会・制度評価分科会のうち、今回は評価結果(案)を本研究評価委員会に諮り、評価の在り方、評価方法の改善、今後の運営等について御意見をいただきたく存じます。各分科会資料は、あらかじめ委員の方々へお示しし、内容を確認いただいております。また、各委員から事前に評価項目に従いコメント・御質問をいただき、その対応案を研究評価課と各推進部にて作成し、事前に共有している状況です。本議題では、全事業 7 件に係るメタ評価に関する事項について御説明した上で、御審議をお願いする形となります。なお、この公開セッションでは公開情報の対応案のみ説明し、非公開情報については、非公開セッションである議題 4 全体を通しての質疑の冒頭にて説明を行いますので、その点よろしくお願ひいたします。

それでは、事前に共有を行いましたメタ評価に係る御質問・コメントについての復唱及び、それに対する回答・対応案について説明してまいります。

最初に、評価項目 1 番目「分科会委員の適切性・改善点について」です。こちらの評価コメントとして、まず以下の点をいただいております。①どの事業も専門性を重視した適切な委員選定がなされていたと判断する。②おおむね適切な人選がなされている。③委員選定において特に隔たりと言えるものは見受けられなかった。中立性を害する委員がいるようには見受けられなかった。④専門分野の構成など評価対象に応じた適切な委員選定がなされていると判断する。どの事業も適切な委員選定がなされていたと判断する。また委員の類型だけでなくジェンダーバランスにも配慮されてきている。評価の中立性を害するおそれがある者を委員から除外しているとの内容でした。

以降は、回答・対応案を要するものとなります。御質問・コメント⑤、中間評価からの評価委員の入替えについて基本的な方針はあるのか。分科会長や会長代理のような主要メンバーを継続委任することは、評価の一貫性や事業経緯の理解の観点で望ましい一方、対象の委員を継続する場合、視点の固定化や大きな社会・産業環境の変化があった場合等、適切な対応が必要といった趣旨の質問であるとのことでした。回答・対応案としては、中間評価での委員適性等の再点検を行い、委員適性として大きな問題がなければ、中身としては評価コメントの内容や分量等ということで、評価の継続性の観点から継続していただいております。ただし、研究開発内容に併せて委員を選定しているため、御指摘のように産業環境の大きな変化があり、プロジェクト実施期間中に研究開発項目の修正があった場合は、その観点

も考慮し委員の選定を実施しております。次に御質問・コメント⑥、国際的なベンチマークは重要であるが、外資系コンサルティングファームが入っているのは情報漏えいの観点からいかなものか。燃料電池や革新ロボについて御指摘をいただいております。回答・対応案としては、分科会委員選定に当たりましては、本事業を適切に評価いただける委員構成となるよう努めております。結果的に外資系コンサルティングファームの方に委員をお願いする場合がございますが、選定時には十分に利害関係確認を行い、また委員委嘱時には委員に対し、直接に守秘義務を課し、その旨は事前説明の際にも十分御理解いただくよう努めております。

続いて、2番目の評価項目「評価プロセスの適切性・改善点について」です。御質問・コメント①として、評価資料、評価実施方法ともに特に重要な欠落があるようには見受けられなかったとのことです。この点ありがとうございます。次に御質問・コメント②、現地調査会を実施していないプロジェクトが多いけれども、開催しなかった理由があれば御教示いただきたい。回答・対応案としては、現地調査会については、評価をしていただく上で、「現地で研究開発成果を見ることが必要であるか」という観点から、推進部と協議の上、実施しております。今回の評価対象プロジェクトについては、検討の結果その実施をする必要がなかったため、現地調査会が少なくなっております。次に御質問・コメント③、事業計画の線表に評価対象期間を矢印などで明記しているプロジェクトもあれば、記載のないプロジェクトもある。中間評価を実施している場合は、中間評価から終了時評価の時点までが評価対象と理解しており、プレゼン資料を読み進めれば本文中に評価対象期間が明記されていることもあるが、一目で評価対象期間が分かるよう事業計画の線表には明記するべきではないか。つまり、記載内容を統一された方がよいとの御指摘になります。回答・対応案として、御指摘はごもっともであり、現状も評価資料作成ひな形の上ではそのようになっているものの、その徹底がなされておりました。この点、御指摘を踏まえ、徹底するよう図ってまいります。次に御質問・コメント④、一部のプロジェクトのアウトカム、アウトプット目標について「何々に貢献する」、「何々に資する」のような表現が見られるが、これらは研究開発の目標としては具体性にかげ、反証可能性（どのような場合に未達成と評価されるのか）が確保されていない。回答・対応案として、各研究開発テーマについては、アウトプット目標として個別の達成目標を設定しているものの、アウトカム目標は、NEDOのプロジェクト単位としては他のプロジェクトと有機的に設計されているため「何々に貢献する」、「何々に資する」といった目標しか設定せざるを得なくなっているプロジェクトが存在するのも確かです。そのような場合であっても、関係プロジェクトについても評価資料において取りまとめることとなっており、各委員にはそれぞれのプロジェクトの役割、関係性を説明した上で、全体設計にこのプロジェクト成果がどのような影響を与えるかという観点にて、分科会では評価をいただいている次第です。次に御質問・コメント⑤、NEDOの知財マネジメント方針では、「受託者が発明等（ノウハウを含む）を成した場合には、直ちに知財運営委員会に成果の内容の届出、知財運営委員会はその取扱いを決定する」また、「NEDOは受託者に対してバイ・ドール調査を実施し、知的財産権の利用実態を把握する」となっている。現状では、ノウハウについては知財運営委員会に報告されたかどうか明らかでなく、また、NEDOのバイ・ドール調査の対象となっているのかどうか明らかでない。本来であれば、これらの点はマネジメントの評価プロセスに含まれるべきと考えるとの御指摘になります。回答・対応案として、NEDOの契約期間では委員業務の成果に係る産業財産権等の対象とならない技術情報のうち、秘匿することが可能で財産的価値があるものについて、NEDOと実施者が協議の上でNEDOが指定したものをノウハウと定義し、実施者から報告書をもってまいります。また、現状の評価プロセスにおいても、ノウハウに相当する成果も含めて事業の成果について報告し、評価いただいております。他方、現状の活動で網羅的に把握できていない可能性もあり、プロジェクトマネジメントの高度化の観点から、ノウハウや特許に限定せず事業戦略を書いてもらい、プロジェクトマネジメントに生かしていこうといったアイデアを現在検討

しております。それが実現できれば、より網羅的、かつ具体的にノウハウを把握・管理する方法にできるのではないかと考えており、この情報も評価に活用することを検討しております。次に御質問・コメント⑥、個々のサブテーマの独立性が高いプロジェクトでは、ステージゲートを通過できなかった、もしくは最終的に目標を達成できなかったテーマがあっても、全体の目標達成に大きな支障は出ないと考えられるが、個々のサブテーマ間の関係が強くあるサブテーマのステージゲート未通過、目標未達が全体の目標達成に大きな影響を与えるようなプロジェクトも存在する。そのようなプロジェクトは、サブテーマを立てるなどの適切なマネジメントが行えたか評価されるべきではないかとの御意見になります。回答・対応案として、ステージゲート審査を通過できなかったテーマがあった場合、プロジェクト内で影響を検討し、対応を図るという形に現在している状況です。

続いて、3番目の評価項目「評価結果の適切性・改善点について」です。こちらにつきましては、回答・対応案を必要とする御質問・コメントがございませんでした。①評価コメントの肯定的意見、問題点・改善点・今後への提言の判断根拠はおおむね適切である。②終了時評価らしくプロジェクト終了後のアウトカム達成に向けた有意義な助言が多々なされているとのコメントをいただいております。この点ありがとうございます。

最後に、4番目の評価項目「評価結果反映状況の適切性・改善点について」です。まず、①中間評価における指摘事項には対応がなされている。②今後の提案に関しては各プロジェクトもおおむね必要な記述は記載されているように見受けられたとのコメントをいただいております。ありがとうございます。次に御質問・コメント③、重要な評価項目であり「単に反映した」ではなく、「どのような改善効果があったか」を具体的に示すとよい。海洋プラスチックなど一部のプロジェクトでは言及があったとのことで、今後の提言とともに、後継及び関連プロジェクトで活用すべきであるとの御意見になります。回答・対応案として、その御指摘を踏まえ、評価資料作成ひな形へ改善効果など補足の記載を行うなど、見直しの検討及び徹底を図ってまいります。また、評価結果の活用については、引き続き各部へと働きかけてまいります。次に御質問・コメント④、アウトカムは今後顕在化する事業が多いため、実用化の進捗や市場の拡大を事後的に把握・整理することが重要。実施者、NEDO 双方で追跡調査が可能になるようデータの管理やフォローアップの体制を整えていただきたいとの御意見です。回答・対応案として、追跡調査に関しては、まず1ポツ目の実施者単位ですが、アンケートにより各テーマの実用化情報を集計し、収集データは新システム上で双方が確認可能とした管理機能の強化を現在行っている最中です。2ポツ目の事業単位としては、NEDO プロジェクト由来の製品サービス、売上等の一次データを継続的に集計する新たな調査スキームを構築中でございます。3ポツ目の市場把握については、一次データを基に、プロジェクトや技術、市場、産業、属性別の切り口で追跡調査を行う仕組みを整備予定となっております。こちらに関しては、最後の議題で御説明があると思います。説明は以上です。

<質疑応答>

【木野委員長】 どうもありがとうございました。それでは、ただいまの御説明に対する御意見、御質問等をお受けします。原田委員お願いします。

【原田委員】 確認ですが、個別事業に係る御説明については、もうされないということでしょうか。

【板倉専門調査員】 特に全体に関わることであればこの場でいただきたいですが、その他については、休憩後の非公開セッションにて御意見をいただければと思います。

【原田委員】 分かりました。私、個別のところでは幾つか質問を行っておりますが、あとは、ほかの委員の方々のコメントを見ますと、アウトカム設定の仕方については少し統一性を持たせる。場合によっては、モデル的なものを作るといったところも必要ではないかと全体を通して感じました。また、先ほど

「数値化することが難しい」といった御指摘もあったのでしょうか。非常にアウトカム設定によって、委員評価にばらつきがあるようなところも結構あるといえますか、アウトカムの解釈について感じるところもございます。間接的に、社会的にこのぐらい貢献するなど非常によく分かるのですけれども、ただ、その事業がもしなかったらという話なのか。そうしたいろいろな論点があると思いますので、この場でも、ぜひアウトカムをどのように NEDO 事業で設定していくかという観点で、もう少し方針があってもよいように思います。非常に各事業がばらばらになっているというのは、感じておりました。

【木野委員長】 ありがとうございます。今田部長よろしくお願ひします。

【今田部長】 NEDO 事業統括部の今田でございます。コメントをありがとうございます。アウトカムに関しては、これまでも御指摘をいただいており、今いただいたコメントもおっしゃるとおりだと思っております。実のところ、「アウトカム設定を行うためのガイドライン」というのも、私ども NEDO で作って運用はしているところです。しかしながら、御指摘のように個々の事業によってもその捉え方が違っていたり、我々がアウトカムという言葉で使っているものも、世の中的にはアウトカムのものとインパクトのものが混ざっていたりということもあります。ですので、そのあたりを今後のプロジェクト立案の段階では、より分かりやすく整理していきたいと、まさに今その検討を始めているところです。インパクトに近いところをアウトカムに設定し、その後、追跡でといてもなかなかそこまでウオッチできるものでもございませんので、そのあたりの定義、言葉の使い方も含め、うまく分かりやすく整理していきたいと思っております。現段階では、ここまでの回答となります。

【木野委員長】 どうもありがとうございました。原田委員、今田部長のコメントというのは非常に重要なポイントです。確か、これは前回でも議題として、議論を行ったと思ひます。アウトカム設定、そしてアウトプット設定に対する評価の在り方に関して、アウトカムのほうが比較的優しい評価になりつつあり、アウトプットが定量性を持ちやすいが故に、厳しい評価になってしまう傾向にあると思ひています。ただ、アウトカムは、テーマ設定された時点において、多分、分科会での議論とは別にすでにある程度のイメージができていて、研究成果を実際に評価する段階において社会実装に向けた具体的なアウトカムとしての期待が持てるか否かの判断基準で評価されているように思ひます。そうした評価に対する一般的な見方に対して NEDO がこれらの評価結果をどのように受けとめて、それをアウトカムと連携させながら、具体的なアウトプットとその定量的な評価基準の設定がなされるのがよいと思ひます。確かに分科会ごとに少し温度差があるのは間違ひないと思ひますので、そこも調整していきながら、また期待する具体的な成果が創出されていなくとも、その研究で得られた知見がどのような効果をもって世の中に広がっていったかも重要だと考えています。その課題から当初予想もしなかった気付きや発見も結構多くあると思ひますので、そういった意味では、その研究課題を実施したことの有効性や意義というものをしっかりと押さえられる形でまとめていくのが重要と私も感じています。

そのほか、いかがでしょうか。鈴木委員お願ひします。

【鈴木委員】 毎回ノウハウの件に関して申し上げていますが、また一言申し上げたく存じます。この点について、少なくとも法律で規定されている営業秘密に関してはきちんと把握し、評価に生かしていただくよう再度お願ひいたします。ノウハウの全てを把握しろと言っているのではなく、少なくとも不正競争防止法であるとか、規定されている営業秘密に関しては報告をさせる。その後、NEDO で追跡評価をするということが必要と思ひしております。以上です。

【木野委員長】 ありがとうございます。ノウハウ云々を含めたところも毎回話題になっております。関連する事案として、2024 年には特許出願の非公開が制度化されていますので、それとの整合性をどのように取るかも重要になると思ひます。この非公開の制度は、あくまでも経済安全保障上の観点に加え、国家や国民の安全を損なう事態の発生を抑制する（いわゆるデュアルユースに対するリスク管理）意味合いを持っていますが、研究を推進する上におけるノウハウの取扱い等といったものは別枠として、

しっかりと管理、追跡支援することが必要だと思います。ノウハウの管理は極めて難しい部分はあると思うものの、ぜひそのあたりをお考えいただけると良いと思います。全てがノウハウとして抱き込まれてしまえば、何をやっているのかがよく分からなくなってしまう。極端に申し上げれば、そういったこともあるのではないかと感じます。

そのほか、いかがでしょうか。五内川委員お願いします。

【五内川委員】 五内川です。これは少しメタ評価ではなくなってしまうかもしれませんが、先ほど御質問のあったアウトカムとも絡みます。点数が少し低いような評価があったときに、もちろん現場としては、それをどのように改善するのか、そもそもの理由は何かといったことをやっていると思います。一方で、メタ評価になると、点数のあまりよくない案件があるということ自体は、このメタ評価ではあまり審議としては考えなくてよいということなのか。そのあたりについて、どういう形で進めていくのがよいのか。やはり点数が低いものが目立ってしまいます。答えがあるわけではないですけれども、私そこが常に疑問に思っているところです。

【木野委員長】 御指摘どうもありがとうございます。確か、今回も一部の委員がC評価をした評価項目がありまして、それに対して当委員会の何人かの先生から、「その内容に関する分科会としての考え方をもっと明確にしてほしい」という御意見があります。ですが、確かに五内川先生が言われるように、メタ評価という考え方からすれば、あまりそこにこだわることはないのかもしれませんが、前回もそうでしたが、この親委員会では少しもやもやとした感じで進んでいるところもあるように感じています。ですので、結論といいますか、その点に関しての考え方を委員会内部で明確にしておくことは重要だと思います。NEDO サイドとしては、この件に関してどのような見解をお持ちでしょうか。

【薄井課長】 事業統括部の薄井です。評点については、おっしゃるとおりメタ評価の観点から評価するのは難しいと思っております。また、どのように評点を捉えているかというところでは、評点が低い場合には、そのとおりのコメントも連動して厳しい指摘がされているか。評点が高い場合には、確かにその評点の根拠となるコメントがされているか。そうしたところを評価していただけるとよいと思います。評価の目的としては、改善というところがございますので、評点が低いから悪いといったところにはないと思っております。

【木野委員長】 今、五内川先生がコメントをされたのは、ただいま薄井課長からあった回答よりも、もう少し踏み込んだところがあったように思います。確かに、事前評価や中間評価の内容がその後の研究活動や委員会での評価にしっかりと反映されているかどうかという点があります。それとも関係しますが、委員の中からC評価が出たとしても、それほど多くはなく、C評価の内容を見ますと、厳しいコメントであっても研究課題の今後に向けた前向きな意見が多く、具体的に何が問題であったかということを書いてある報告書も多いように思うのです。ですから、私たちは単なるC評価と、前回のこの委員会でも、事務局からは「これは単なる一つの目安です」と言われましたが、どうしても具体的な数字が点数として出てくると気になってしまいます。逆に、分科会の中でこのC評価の背景というか、何がそのような評価になったのか。あるいは、それに関連した研究活動に何か問題があったのか。この後の展開をどのように考えているかという部分がいつも希薄になっており、私たちには現場の状況がよく見えていません。効果的な研究や委員会活動を行っていく上では、こういったコメントの見える化の工夫や明文化するのはなかなか難しいかもしれませんが、それがこのメタ評価の中にあっても、親委員会としてその時の状況が見える化できることはとても意味のあることだと思っています。単なる評価云々だけでなく、そういった委員の先生方の心の思いをぜひ酌み取っていただきたい。これは毎回話題になっていることですので、私たちも納得するという点に関して消化不良になっていると感じています。議論する時間が短いため、なかなか詰められていないところもあると思います。これは、ここの委員会に限らず、全ての委員会に対しても同じだと思います。評価する観点において、メタ評価である

うと個別評価であろうと、その内容が私たちには見えていない部分があります。そういったことをなるべく見える化させることも非常に重要だと私は感じます。五内川先生、このようなところでよろしいでしょうか。

【五内川委員】 ありがとうございます。

【木野委員長】 では、吉本委員お願いします。

【吉本委員】 吉本です。ただいま C 評価の話がございました。私も個別のところでは質問したのですが、C 評価をつけられている先生は、評価書を読む限り、恐らくアウトカムについて少し懸念のあるようなコメントを出されている方が多いのではないかと推察されます。私は、この終了時評価で「アウトカムの方向性について大変有益な助言がなされている」と回答いたしました。C 評価をつけている委員の方は、非常にネガティブなことを言っているというよりは、むしろプロジェクトの今後について、ほかの委員よりも踏み込んだ有益なコメントをされているように感じております。ですので、C 評価がどうのこうのというよりは、ここに書いたように、とても意味のあるコメントがこの最終評価でなされているため、それを今後ぜひ推進部の方であるとか、プロジェクトの担当者が受け止めて生かしていただければと。C 評価にも意味があると感じており、ぜひその後のフォロー等に生かしていただければよいのではないかと思います。感想に過ぎませんが、以上です。

【木野委員長】 非常に重要な点を指摘いただきまして、ありがとうございます。まさに、おっしゃるとおりだと思います。その内容を見ますと、アウトプットに対するものとアウトカムに対する見方というものもあると思うのですが、その課題の今後の展開に対する危機感など、この委員会の方向性を含め、真剣に考えている委員が比較的 C 評価をつけられているケースが多いと確かに私も感じます。そうした中で、これがメタ評価委員会の中では、具体的な内容としてそれをどうのこうのと言うわけではなく、吉本委員が言われたように、そういったものをどう扱ってどのように次のフェーズに展開していくか。そういった議論がなされているかどうか、そういった委員会運営がされているかです。委員会の議事録を見る限りにおいては、そうした内容に触れていて、前向きな取り組み姿勢で書かれているのですが、最終的な結果報告になると、C 評価としてしまうことで委員会での議論や考え方とは異なる印象を与えてしまっている場合があると思っています。ですから、実際の議論が見える化できるようにまとめていただければよいのではないかと強く感じます。どうもありがとうございました。

そのほか、いかがでしょうか。鈴木委員お願いします。

【鈴木委員】 今の御説明の中には入っていなかったのですが、私から、メンバー選定に関わる話として質問をさせていただきました。それというのは、評価委員のメンバーということではなく、プロジェクトマネージャーが頻繁に毎年交代しているようなケースが1つあったところでの内容となります。それに対する御回答として「同じプロジェクト内のメンバーからマネージャーを登用して引き継ぎを行いました」とのことでしたが、一般的にこのようなプロジェクトマネージャーが1年ごとに変わるプロジェクトは多いのですか。

【今田部長】 事業統括部の今田です。プロジェクトマネージャーについて、できるだけ変わらないに越したことはないと思っております。ただし、そのプロジェクトマネージャーを担当するのが、私どもの例えばプロパーの職員といった場合もありますけれども、中には、企業から出向いただいているその分野の専門家の方にプロジェクトマネージャーを担っていただいている場合もございます。そうした際には、どうしてもその出向の任期との関係でメンバーが変わらざるを得ないことも生じます。しかしながら、1年でぐるぐる変わるというのはあまりないパターンですので、何か特殊な事情があったのだと思います。

【鈴木委員】 これは、恐らくこのプロジェクトの特殊ケースだと思うのですが、基本的に評価の際に、そういうプロジェクトマネージャーのような NEDO 側の運営に対する評価というのは行われているので

しょうか。

【今田部長】 NEDO のマネジメントに関してという趣旨でしょうか。

【鈴木委員】 おっしゃるとおりです。

【今田部長】 その点は、評価項目の中に入れてございます。

【鈴木委員】 それというのは、プロジェクトマネージャーがどのような貢献をされたかなど、そうしたところを評価いただいているのですか。

【今田部長】 プロジェクトマネージャーも含め、NEDO 側がどのような機能を発揮できているか、あるいは課題があったかどうかということを確認しています。任期については、特出しはしてございませんけれども、そうしたところです。

【鈴木委員】 ありがとうございます。了解しました。

【木野委員長】 どうもありがとうございました。委員の選定に関して、私のほうからも少し申し上げます。ここで議論してよいかどうか分からないのですけれども、SIer (システムインテグレーター) といいますが、いわゆるシステムの設計から開発、運用、保守・管理を通して請け負っている企業を指しますけれども。そうした企業に所属している人が委員になっているケースがあります。NEDO が評価システムそのものをそうした企業に任せてしまっているかのように見えてしまうところも感じます。そうした企業に所属している人が委員に入り、全体的な運営に関わってもらうことで、マネジメントも含めて効率的に精度良く評価をしてくれるとは思いますが、この SIer の介在に関しては、少し気になる部分がありました。このあたりについての委員選定をどうお考えでしょうか。SIer の考え方や方法論が NEDO の独自の評価システムに関わってくことで、評価方針の在り方やマネジメントなどにぶれが生じてしまうことはないか。一方では、SIer の委員からの意見をうまく取り入れながら、NEDO としての会議の進め方、運営の仕方とうまくマッチングさせて効果的になる場合もあるかと思えます。私の読み違いかもしれませんが、今回初めて SIer 所属の方が委員に採用されているケースもありましたので、どのような効果を狙ったのか、あるいはまったく考慮しなかったのか気になった次第です。

【松田専門調査員】 松田です。SIer に関しても、基本的には入っていただくときには利害関係についてしっかり確認しております。ですので、そこから SIer に発注するなど、その後つながるといったことが基本的にはないような形になっていると聞いております。

【木野委員長】 利害関係を考慮する運用に関しては、NEDO 内では明確になっていると思えます。私が言いたかったのは、こうした SIer が委員会活動において効率的な運用を実現させるためのサポート約となれば、NEDO の評価運用システムの高度化も図られ、利害関係を回避しつつ一体的に管理できるのではないかという気がいたしました。企業組織としてだけでなく、SIer 所属の方が 1 人ずつ分科会に配置されているのもよいかもしいないと思えました。今回、ロボット関連の課題でその方たちが参画されていますので、いずれメタ評価体制が確立されて慣性系に近づいてくると、私たちのこの親委員会の存在意義も無くなっていくという感じがします。私がこだわり過ぎているのかもしれませんが、こうした SIer のような企業や専門家人材を活用するのも委員会運営の効率化を図る上で一つの手ではないかということでコメントをいたしました。

【松田専門調査員】 ありがとうございます。

【木野委員長】 そのほか、いかがでしょうか。

それでは特にないようですので、ここで取りまとめを行います。皆様、本日も積極的に貴重な御意見をいただき、ありがとうございました。個別案件については、非公開セッションで取り扱うものもあると思いますが、アウトカム、アウトプットの具体的な策定の仕方、また、それに対する分科会ごとの策定の仕方と評価基準における温度差の問題を含め、そうした部分が実際の評価につながっていく。それから、その評価結果としての取扱いの適切性やそうした評価になった背景や考え方を含め、それがどう

いう経緯で次のステージに発展的につながっていったのか。そうしたところを見える形でまとめていただくことに大きな意味と重要性があると思います。また、見える化を果たすことを期待します。

また、ノウハウ等に関して、これは知財の在り方を含めてですが、非常に重要な案件に関してはノウハウとして整えておく。特に特許の非公開といったことも制度になっている中で、NEDOとしてはこういうものをどのように運用し次につなげていくか。創出された技術の追跡を含め、非常に重要なものであれば、一定の枠組みの中でそれをしっかりとフォローしながら次に展開していく。これがとても画期的なものにつながっていく可能性もあると思います。実行することは非常に難しいと思いますが、ぜひこういった点に関して御検討いただければよいのではないのでしょうか。

また、メタ評価の位置づけの中において、なかなかこの委員会としては踏み込めない部分があり、私たち研究者の立場からすれば、技術的な内容も含めてもう少し知りたい。どうしてこういう話になったのかという質問で、毎回「いや、それはメタ評価ですから」と言われてしまうと、なかなか口出しができない部分もございます。そのあたりのところは、課題評価の上でもある程度は研究の内容も含めた説明が少しあった方が、メタ評価をする上でも意味があるのではないかと。少しそのような印象を持っています。ぜひそうした点を踏まえていただければ大変ありがたいと思っています。

以上、議題2に係る7案件についての取りまとめとします。今回報告のありました内容に関して、問題ないと確認しましたので、御承認いただいたこととします。助言等については今後の運営に活用していただければ大変ありがたく思います。それでは、議題2を終了とします。

3. 2025年度事業評価について【報告】

(1) 風力発電等導入支援事業（中間評価）

(2) 脱炭素化に向けた次世代航空機実用化開発調査事業（終了時評価）

【板倉専門調査員】 それでは、今年度の事業評価結果について、資料3に沿って御報告します。

まず1ページ目ですが、事業評価として今年度は2件、風力発電等導入支援事業（中間評価）、脱炭素化に向けた次世代航空機実用化開発調査事業（終了時評価）を実施しました。それぞれ分科会長の承認をもって、評価結果が既に確定しておりますので、事業評価結果はこの後のページの御報告に沿った形で確定してございます。

また、2件の評価結果概要については、資料3の後半から、委員名簿も含め、6ページまでに記載したとおりです。あらかじめ本資料をお示ししていることから、御確認いただいたこととし、例年どおり事業評価の報告は以上とさせていただきます。その上で、気になる点などがあれば、御指摘は承りたいと思いますので、よろしく願いいたします。

<質疑応答>

【木野委員長】 ありがとうございます。それでは、ただいまの説明に対する御指摘等をお受けします。浅野委員お願いします。

【浅野委員】 浅野です。1件目の風力に関して、評価コメントの最後のほうに非常に重要な点がございました。プロジェクトの実施者側が蓄積したデータセットについて、風力の様々な風況、発電量の予測などといったものを、もちろんその事業主体が維持することは当然であるものの、ぜひNEDO側でそれにアクセスできるようにする。技術開発成果としてのデータの継続性として、そこは、あらゆるプロジェクトで大事なことです。で、「まとめていただきたい」と書いてあるように、それを実現していただきたいのが私の希望です。以上となります。

【板倉専門調査員】 ありがとうございます。

【木野委員長】 今の御意見に対して対応案、あるいは考え方、方向性について何かあれば、よろしく願い

いたします。

【指田専門調査員】 この事業評価の事務局を担当しました指田と申します。あまり具体的なところは存じ上げていないのですが、風況・海況調査はセントラル方式が導入されており、そちらと実施内容とデータの共有や連携を図りながら進めていると聞いております。その連携の中で、NEDOが収集したデータも活用されていくと認識しております。

【木野委員長】 よろしいでしょうか。

【浅野委員】 NEDOとしては当然だと思いますけれども、日本で今、洋上風力開発で一番問題になっているのは、その入札方式に問題があり、事業撤退をした場合に、国のセントラル方式で提供するデータプラス、民間事業者が集めた様々な海底の地質のデータなどを併せ持って次の後継プロジェクトを安全かつ効率的に推進する。そういう体制をNEDOにしっかりつくっていただくことが大事だと思っています。以上です。

【木野委員長】 では、原田委員お願いします。

【原田委員】 政策投資銀行の原田です。私もこの問題について、いろいろと NeoWins（洋上風況マップ）の改定であるとか、沖合の風況調査のところでも委員会に入れていただいている中で常々思っております。こうしたNEDO事業で収集したものは、当然NEDOに一定のアクセスがあると理解していますし、収集できているのですが、各事業者様が彼らのコストで行った、付加的にやったものは非常にデータセットが複雑になっております。毎回毎回、例えば既存データを使って何かAI解析するといったところでは、NEDO事業でやるたびにデータ提供というのを一々していただくといったように、苦勞をされながら収集されているとの理解です。もちろん、データはコストをかけた人のところに帰属するというのは非常によく分かるものの、何かデポジットのようなものをしっかり国としてつくっていく。それをNEDOが管理するのか、セントラル方式ですとJOGMEC様がやっています。何か本当に仕組みが必要であり、様々なところでごく非効率が生じていると思います。これはエネ庁様も含め、御議論いただくべきことかと思っております。

【木野委員長】 ありがとうございました。今の観点は、風力や発電に関するところでしたが、これは他分野に関しても全く同じことが言えます。特に膨大なデータの取得に関しては、大きなお金を使って網羅的に取得した内容をデータベースとして構築するということがよくあります。重要かつ貴重な情報ですが、それを事業が終わった後に誰が管理して、どのような形で活用をするのか。これに関しては、実施者自身がコンソーシアムをつくり、そこで管理するケースが多くみられるのですが、時間が経過すると、それが自然消滅のようにどこにいったかよく分からないケースもあります。国税を使ってこういったものをしっかりつくっていく。それも当然、時代であるとか、いわゆる時が過ぎればまた陳腐化してしまう可能性もあるものの、その内容が次の後継になるとか、あらためて見直す上では、非常に重要なポイントがあると思います。アクセスの仕方についても、浅野委員、原田委員からもありましたように、もう少し使いやすい形にできないものでしょうか。あるいは、NEDO事業の中ではそういったものを独自に管理していくということは少なく、実施者の方に任せるようになっていますが、こういったものも含め、どのようにこのような貴重なデータベースを効果的に活用するのか。もしくは、今後AI等を含めて動くケースが出てくるとすれば、こういった情報というのは、非常に重要な基盤になるものだと思います。これは扱い方の問題も大変難しいですが、ぜひこういった御指摘のあった内容に関しては、何らかの形で次につながるものとして有効活用をする。また、実施者だけでなく、多くの方たちがそれを使えるような形であるとか、そういったことも含め、ぜひプロジェクトを終えた後も、うまくつないでいただけたら大変よいと考えます。これは風力発電だけの問題でなく、全分野に共通して感じることでありますので、よろしく願いいたします。

では、今田部長お願いします。

【今田部長】 事業統括部の今田です。コメントをありがとうございます。私ども、今ちょうど見直しと申しますか、何とか高度化できないかと思っているところが1つございます。事業推進をしていく上で、事業者の皆様には企業化計画書や事業化計画書を出していただいておりますが、ここに記載いただく内容、粒度といったものをよりしっかりと議論しながら、NEDOと事業者の皆様との間でコミュニケーションを取り、確認しながら進めていく。その中には、今までですと、例えば直接売上げが伸びるようなビジネスに関するところだけの記載であったようなところも、今御指摘があったようなデータの取扱いなども含め、そういった計画書の中に位置づけて議論していく。そうしたマネジメントに徐々に変えていくことができれば、御指摘いただいたようなところを、プロジェクト期間中のみならず、プロジェクトが終わった後も、何かしら事業者間で連携をしながらその計画に基づいて進めていくといったベースができるのではないかと考えております。まさに今その検討を始めているところですので、これがうまく実現できれば、順次プロジェクトの方にもそれを適用していきたいと考えております。

【木野委員長】 ありがとうございます。事業が終わった後は、追跡評価という形で今、新しい見直しが積極的になされています。それは、事業の社会実装に向けての追跡評価、あるいは委員会活動の在り方に対するものへのフィードバックという形の中で重要な点の見直しや見当がなされていると思います。今回話題になったデータベースの管理の在り方などについても、いかに粒度の高いものとして次につなげていくのか。これは、1つの追跡調査の枠を少し外れるかもしれませんが、ぜひ発展的に次の活動に展開できればよいと思います。

どうもありがとうございました。時間が来ましたので、これで議題3を終わりたいと思います。皆様から頂きましたコメントを含め、非常に重要な内容が含まれていますので、今後の評価方法や改善、今後の活動における助言として活用いただければと思います。以上、ありがとうございました。

では、以降の議事進行は、事務局から説明をお願いします。

【板倉専門調査員】 事務局です。次の議題4以降は、情報漏えい防止及び闊達な意見交換を促進する観点から非公開で行います。傍聴者向けの配信はここで終了となります。御視聴ありがとうございました。

(非公開セッション)

4. 2025年度 全体を通しての質疑

省略

5. 2026年度の間評評価、終了時評評価対象案件について【報告】

省略

6. 追跡調査・評価について【報告】

省略

7. 閉会

以上